ストライク・ザ・ブラッド
STRIKE THE BLOOD
APPEND1
続・聖者の右腕／人形師の遺産
－第三章－

ストライク・ザ・ブラッド
STRIKE THE BLOOD
APPEND1
続・聖者の右腕／人形師の遺産
－第三章－

1000450786-B

ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

APPEND1

続・聖者の右腕／人形師の遺産
－第三章－

著／三雲岳斗

イラスト／マニャ子

第三章　人形の夜　— Night of the Living Doll —

1

私は、壊れかけている——
柩型のベッドに横たえられたまま、彼女は薄暗い工房を眺めていた。
スワニルダ。それが彼女の名だ。人工生命体の肉体に精密な機械の骨格を埋めこんだ、世界に一体だけの生体人形。〝人形師〟ザカリー・アンドレイドの手によって創造された、生きた芸術作品である。美しい少女の外見と高い戦闘能力を与えられたスワニルダは、アンドレイドの忠実な僕であり、愛玩物であり、そして彼の伴侶でもあった。
しかし今や彼女の肉体は壊れかけていた。
世界最強の吸血鬼〝第四真祖〟の眷獣に焼かれたのだ。
精密な機械の骨格はいびつに歪み、関節を動かすたびに不快に軋む。
美しかった肉体の半分は焼けただれ、絶え間ない苦痛が彼女を苛んでいた。
私は、壊れかけている——スワニルダはそれを自覚している。それでも彼女は、絶望してはいなかった。スワニルダは人形。アンドレイドの作品だ。創造主たる〝人形師〟が、すぐに彼女を直してくれるだろう。動かなくなった機械を取り替えて、醜く焼けた肌を張り替えて。
しかし〝人形師〟アンドレイドは、なぜかスワニルダにはすぐに手を出そうとしなかった。
目もくれず、工房の奥の調整槽をじっと見つめ続けている。
「クッ……クク……面白い餓鬼どもだったなぁ」
クセの強い長髪を鬱陶しげに振り払いながら、アンドレイドは笑っていた。素肌の上に白衣をまとった、退廃的な雰囲気の人物だ。科学者や職人というよりも、時代遅れのロック歌手か、反社会的な芸術家を連想させる男である。
「あれが第四真祖の力か。いいよ、実にいい。永遠に尽きることのない無尽蔵の力。あれこそ俺の芸術に相応しい。欲しいねぇ。おまえもそう思うだろ、スワニルダ？」
「——肯定」
激痛に耐えながら、スワニルダは答えた。
彼女の肉体を破壊し、苦しめている元凶こそが、アンドレイドが賞賛している第四真祖の力なのだ。
その事実がスワニルダの思考を乱す。彼女は壊れかけている——
「どういう気まぐれかは知らねーが、試験体に魔力を供給したのは、やっぱりあの第四真祖の餓鬼だったんだなぁ。つまり試験体を手に入れれば、やつの〝永遠〟が俺たちのものになるというわけだ」
陶酔したような口調で、〝人形師〟アンドレイドが言った。
彼の言葉に、スワニルダは希望を取り戻す。眷獣共生型人工生命試験体アスタルテ。それはスワニルダとほぼ同時期に、アンドレイドに調整された人工生命体だった。
残りわずかな寿命しか持たないはずの、使い捨ての試作品。しかし彼女は数奇な運命によって、第四真祖から魔力を分け与えられることになった。人の手で作られた人形の身でありながら、吸血鬼の持つ永遠性の一部を手に入れたのだ。
だからこそアンドレイドは、アスタルテを取り戻そうとしている。彼の求める、〝永遠〟の芸術作品を生み出すために。そこにスワニルダは希望を見る。〝人形師〟がアスタルテを取り戻すためには、スワニルダの力が必要なはずだからだ。
「命令受諾。執行のために私の修理と、失われた装備の補充を要請します」
アンドレイドに向かって、スワニルダが告げた。
そんな彼女を蔑むように見下ろして、〝人形師〟が愉快そうに口元を綻ばせる。
「修理しろ？　ハハッ、ずいぶん面白いことを言うようになったなぁ、スワニルダ」
「……人形師様？」
困惑しながら、スワニルダが訊き返す。アンドレイドの反応は、彼女の予想と違っていた。〝人形師〟の瞳に浮かんでいるのは、壊れた玩具に向けるような無感動な冷たい光だった。
「何度も教えてやっただろぉ？　人形ってのは、〝永遠〟に美しいまま生き続けるから価値があるんだぜ。所有者である人間が滅びても、な」
「人形師様……その子は……？」
そしてようやくスワニルダは気づく。工房の奥にある調整槽の中に、見慣れない生物が浮かんでいた。直径一・五メートルほどの、奇怪な卵型の人工生命体だ。
それは不定型に形を変えながら、琥珀色の培養液の中を漂い続けている。アンドレイドの優しげな眼差しは、その奇妙な球体へと向けられていた。壊れかけたスワニルダではなく、新たに生み出された人工生命体へと。
「俺が生み出した最高傑作だ。まだ未完成だがな」
「最高……傑作……？」
なぜ、とスワニルダは自問する。〝人形師〟の最高傑作。その称号はスワニルダに与えられていたはずだ。なのに、なぜ——？
「こいつは人工生命体を取りこんで、相手の形質を継承する。要は、ほかの人形を喰らって〝奪う〟ってことだ。こいつに試験体を喰らわせる。本物の〝永遠〟を手に入れるためになぁ」
「私は……私は、どうなるのですか……？」
スワニルダが問い返す。アスタルテを捕獲するのは、自分に与えられた役割だったはず。その役目をほかの作品が担うとしたら、自分はどうなってしまうのか——
「醜く焼かれて壊れたおまえにはもう価値はねぇよ。今のおまえはただの廃棄物だ」
怯えるスワニルダを厭わしげに一瞥し、アンドレイドが酷薄に告げた。
「ナタナエル、起きろ。食事の時間だ」
アンドレイドが調整槽のパネルを操作する。琥珀色の培養液が排出され、ナタナエルと呼ばれた不定型の人工生命体が

目を覚ました。調整槽の蓋が開き、ナタナエルは不気味に蠕動しながら言葉を紡ぐ。

『I...I...accept your order.....Meister』

ずるずると外に這い出したナタナエルが、工房の床を粘液で汚しながら、ベッドに横たわるスワニルダへと近づいた。スワニルダは全身を軋ませながら〝人形師〟へと手を伸ばす。

自らが喰われる恐怖よりも、主人に捨てられたことへの驚愕が大きい。自分の存在意義が、大きく揺らぐ。彼女は壊れかけている——

「人形師様……私は……私は……」

「おまえの部品はナタナエルにくれてやる。おとなしく処分されてろよ、廃棄物」

アンドレイドの言葉が終わるより先に、不定型の人工生命体が、スワニルダの全身を呑みこんだ。スワニルダの全身が焼けるような激痛を訴えてくる。体内に埋めこまれた機械を奪われ、生体組織が喰われていく。ナタナエルが、スワニルダの身体を取りこもうとしているのだ。

スワニルダは抵抗を続けたが、すでに壊れかけていた彼女に、新たな人工生命体の巨体を押し返すだけの力は残されていなかった。不定型の球体に完全に融合されて、スワニルダの姿は消滅する。

「まあ、こんなものか」

想定どおりの結末に、アンドレイドは微笑した。

スワニルダの質量を取りこんだことで、不定型の人工生命体の肉体は、元の倍近い大きさに膨張している。そのシルエットも単純な球形から、より人間らしい輪郭へと近づいていた。スワニルダの知識と経験、そして戦闘能力を受け継いだのだ。

このまま人工生命体や機械人形を、そして人間や魔族を喰らい続ければ、ナタナエルは、いずれ最強の生体人形へと成長することだろう。そうなればアスタルテだけでなく、第四真祖そのものをも取りこむことができるかもしれない。それを想像して〝人形師〟は満足げに笑った。

ナタナエルの身体に異変が起きたのは、その直後のことだった。

「命令拒否……」

不定型の肉体を引き攣らせて、ナタナエルがうめいた。粘土細工のような不格好な巨体が、工房の床に倒れて苦悶を始める。

「ナタナエル？」

新型人工生命体の異常に気づいて、アンドレイドが動揺する。

その間にもナタナエルの異常は進行していた。透き通った肉体に、焼け焦げたような灰色の影が浮き上がり、激痛に耐えかねたように人工生命体が絶叫する。

「ア……ウア……アア……グアアアアアッ！」

「おい、ナタナエル!?　なんだ、これは……!?」

アンドレイドの顔に焦りが浮いた。

不定型の人工生命体の輪郭を歪めて、その背中から現れたのは、新たな人型の影だった。純白の髪を持つ彼女の姿は、融合されたはずのスワニルダによく似ている。美しい左の横顔も。焼けただれた右の横顔も。

「命令拒否……命令拒否……命令拒否命令拒否命令拒否命令拒否……命令拒否！」

私は、完全に壊れている——スワニルダはそれを自覚する。

主人である〝人形師〟に捨てられ、その命令に逆らったとき、彼女の心は壊れたのだ。今の彼女に残された欲求は、たったひとつの目的を叶えることだけだ。

自分の存在価値を証明する。そのために彼女は、自分を取りこんだナタナエルの肉体を喰い破り、再び生まれ変わったのだ。

「〝永遠〟に……生き続ける……ことが人形の価値。所有者である人間が滅びても……！」

「スワニルダ!?　おまえ——!?」

哄笑する生体人形を呆然と眺めて、アンドレイドが怯えたように後ずさる。咄嗟に机の上のウィスキーボトルに手を伸ばしたのは、護身用の魔術を発動するためだ。そんな彼の表情が、前触れもなく苦痛に歪んだ。

スワニルダの左腕に埋めこまれていた絡繰り仕掛けが発動し、山刀に似た巨大な刃が現れた。その先端が、なんの抵抗もなく、アンドレイドの胸へと突き入れられている。

「なっ……」

心臓を貫かれたアンドレイドが、がふっ、と鮮血を吐き出した。

それを見つめるスワニルダの人工の瞳には、なんの感情も浮かんでいない。壊れてしまった今の彼女は、かつての主人すら躊躇なく殺すことができるのだ。

「私は、〝永遠〟を手に入れる——」

焼けただれた頬を歪めて、スワニルダが美しく微笑んだ。

「馬鹿な……スワニルダ……」

アンドレイドの長身が、ゆっくりとその場に倒れていく。絶命した〝人形師〟を無言のまま眺めて、スワニルダは彼の死体を無造作に打ち捨てた。

スワニルダの下半身は、蜘蛛に似た八本脚へと変わっている。金属製のその脚を器用に操り、彼女は地下工房から這い出した。そしてそのまま闇の中へと消えていく。

彼女は完全に壊れている。しかし自分がやるべきことだけは理解していた。

〝永遠〟を手に入れるのだ。試験体を——

2

真夏の海風に乗って漂ってきたのは、つん、と鼻を突く塩素の臭いだった。

気怠い午後の青空に、生温い水飛沫が散っている。彩海学園の屋外プール。女子の体育の授業中だ。学校指定の競泳水着に身を包んだ生徒たちが、順番に背泳のタイムを計っている。

「うー……怠……こんな周りに海しかないような島に住んでて、なにが哀しくて学校のプールなんかで泳がなきゃいけないのよ。荷物増えるし、髪乾かすの面倒いし」

出席番号の都合で真っ先にタイムを計り終えた浅葱(あさぎ)が、プールサイドに座ってぶつぶつと愚痴をこぼしている。バスタオルを頭から被っているのは、気休め程度の日焼け対策だった。絃神島(いとがみじま)は、東京の南方海上三百三十キロ付近に浮かぶ人工島だ。亜熱帯特有の強烈な紫外線が、容赦なく頭上から降りそそぐ。

「いいじゃない、浅葱はスタイルいいんだし。おかげで目の保養になるわ」

そう言って浅葱に笑いかけてきたのは、友人の築島倫(つきしまりん)だった。クラス委員を任されている、大人びた雰囲気の女子である。愛想に乏しく物言いも少しきつめだが、そこがいいという男子も意外に多い。彼女のすらりとした長身を、浅葱は少し拗ねたような目つきで見上げて、

「あんたが言うと嫌味に聞こえるんだけど……ていうか、そういう問題じゃないでしょ」

「まあ、この炎天下にマラソンやらされてる男子よりはマシじゃない？　ほら、暁くんがこっち見てるよ」

「え……!?」

倫に言われて、浅葱は思わず前髪に手を当てた。運動場を走っている古城に見られる前に、スイミングキャップで乱れた髪を直さなければと焦ったのだ。

しかし倫は、慌てる浅葱の反応にクスクスと笑いだし、

「ああ、ごめん。このフェンス、向こうからは見えないようになってるんだったね」

「お倫……あんたね……」

澄まし顔の倫を睨んで、浅葱がうめく。

「ふふっ……残念だった？」

「そんなわけないでしょ。べつに古城のことなんか関係ないし」

強がる浅葱を見つめて倫は微笑み、それから不意にプールの外へと目を向けた。

「そうそう、フェンスといえば、浅葱、〝伝説のフェンス〟の噂って知ってる？」

「は？　なにそれ？　伝説のフェンス？」

どこか間の抜けた言葉の響きに、浅葱がきょとんと目を瞬いた。伝説の武器や防具といわれればまだわかるが、たかがフェンスに伝説もへったくれもないだろう、と思ってしまう。

それでも倫は真顔でうなずき、

「そう。高等部の女子の間で、最近、割と有名な話なんだけど」

「ううん、知らない。初めて聞いた」

「ほら、高等部の校舎の裏庭に、小さな建物があるじゃない。変電室みたいな、倉庫みたいな」

「ああ、あるね」

浅葱はそう言って視線を巡らせた。普段は特に気にしたことがないが、たしかに校舎裏には、倉庫風の四角い建物が建っている。校内に電力を供給するための、受変電設備が入った建物だ。

「周りをフェンスで囲ってあるでしょ。立ち入り禁止だから」

「うん」

「そのフェンスの隙間にラブレターをお供えしておくと、恋が成就するんだって」

「は？」

浅葱が半眼になって倫を見た。

たしかに、普段あまり人通りがないせいか、変電室前のフェンスには、よくゴミなどが挟みこまれている。近くのゴミ箱が一杯だったときに、捨てられなかった空き缶などをフェンスにねじこんでいく生徒がいるらしい。ある意味、フェンスそのものがゴミ捨て場扱いされているわけだ。そんなところにラブレターを突っこんで、恋愛が上手くいくとは思えなかった。胡散臭いにも程がある。

「うっわー……嘘臭い……」

「それがどうも本当らしいのよ」

疑いの眼差しを向ける浅葱に、倫は真顔で首を振った。

「ほら、ウチの部の二年生にイマイ先輩っているでしょ」

「ああ……魔族研究会の」

「夏休み明けに、サッカー部のコサカ先輩に告白しようとしたらしいの。ラブレターに手編みのマフラーを添えて」

「絃神島で手編みのマフラー……って」

それはほとんど嫌がらせではないのか、と浅葱は内心ツッコミを入れる。なにしろ絃神島の平均気温は真冬でも二十度を超えるのだ。

「だけどその直前に、コサカ先輩がほかの女の人と仲良く歩いてるのを見かけて、告白できないままマフラーは捨てちゃったのね。さっき話したフェンスのとこに。ゴミ箱が一杯で入らなかったから、フェンスに引っかけてきたらしいんだけど」

「それって不法投棄だよね……」

「そしたらしばらくしてコサカ先輩のほうから、イマイ先輩にいきなり告(コク)ってきて、二人はつき合うことになったんだって」

「はあ、そうですか」

どうやらコサカと一緒に歩いていたのは、実の妹だったというよくあるオチらしい。結局、マフラーに意味があったのかどうかは謎のままだ。とはいえ、実際に上手くいったカップルがいるという事実は、おまじない、の信憑性を高めるには効果的だろう。

「その噂が広まって、最近そのフェンスにラブレターをこっそり結びつけるのが流行ってるの」

水着の肩紐の位置を直しつつ、真面目な口調で倫が言った。

「結びつけるって、おみくじみたいに？」

「そうそう。そしたら意中の相手のほうから、けっこうな高確率で告白されるらしいのよ。女子の間でしか広まってないはずの噂話なのに、不思議だよね」

もちろん効果には個人差があるんだけど、と補足する倫。健康食品か、と浅葱は呆れる。

「それが〝伝説のフェンス〟ってこと？」

「そういうこと。浅葱もちょっと試してみたら？」

倫が悪戯っぽく微笑みながら、浅葱の顔をのぞきこんでくる。浅葱は、ハッ、と鼻で笑って、

「冗談でしょ。なんであたしが古城に手紙なんか書いてやんなきゃいけないのよ」
「あれ？　あたしは浅葱の意中の相手が暁くんだなんて、ひと言も言ってないんだけどなー？」
すっとぼけた表情で倫が訊き返し、浅葱は、うぐっ、と声を詰まらせた。
「ちょ、ちょっと待ってよ。さっきのイマイ先輩の話って、夏休み明けの出来事だったんでしょ。まだ何週間も経ってないじゃない。どこがどういうふうに伝説なのよ？」
「ああ、それは、ほら……あのフェンス、受変電設備の隣にあるから。電設のフェンス、なんて」
「駄洒落じゃん！」
浅葱はガックリと脱力して、曲げた自分の膝の上に突っ伏した。倫はクスクスと笑っている。
「真面目に聞いて損したわ……まあ、いいけどさ。最初から、そんなオカルト信じてないし」
「浅葱は頭が固いなあ。〝魔族特区〟の住人のくせに」
呆れたように首を振る倫に、浅葱は唇を尖らせた。
「〝魔族特区〟の住人だからよ。誰かが催眠系の呪術を仕掛けたっていうのならまだしも、なんの理論的な裏付けもない縁結びのフェンスなんて信用できないわ」
半ば自分に言い聞かせるように、真剣な口調で呟く浅葱。そんな浅葱と倫の会話に、タイム計測を終えたばかりの棚原夕歩が、目を輝かせながら割りこんでくる。
「なになに、オカルトってなんのこと？　もしかして殺人人形の話？」
「殺人人形？」
唐突に出てきた物騒な単語に、浅葱は怪訝そうに眉を寄せた。夕歩は濡れた髪を絞りながら、わざとらしく怯えたような表情を浮かべてみせる。
「最近、話題になってるじゃん。島内で行方不明者が続出してるって」
「テレビでもやってたね。美人ばかりが狙われるってやつでしょ」
倫が淡々と解説する。夕歩は大げさにうなずいて、
「そうそう。こないだの中等部の転校生とか、危ないよね」
「へー……」
中等部の転校生――姫柊雪菜の容姿を思い出し、浅葱は思わずムッとする。なぜか暁古城につきまとっている転校生の存在は、浅葱にとっては不愉快極まりないが、それはそれとして彼女が美形であることは認めざるを得なかった。
「で、その誘拐犯が人形なの？」
「狂った機械人形だって噂だよ。顔の半分が焼けただれてて、それを張り替えるための綺麗な肌を探してるんだって」
「ありがちな怪談になってきたねえ」
浅葱は呆れたように嘆息した。機械人形の起動コアには、第一非殺傷原則という最優先のコマンドが焼きつけられている。たとえ暴走したとしても、誘拐や殺人を犯すことは不可能だ。もちろん市販されている起動コアではなく、すべての部品を手作業で組んだ自作コアを使えば話はべつだが、そんなものを作れる職人は、世界中探しても何人もいないはずだった。
それでも夕歩は、真剣に浅葱の瞳を見つめて、
「それがさ、彩海学園の校内で目撃されたって噂もあるんだよね。夜な夜な校舎を徘徊して、獲物を探してるんじゃないかって」
「ふーん」
阿呆くさ、と浅葱は肩をすくめた。
明るい真夏の陽射しが、彼女の頬を照らす。濡れた水着の張りついた肌を、焼けた海風が撫でていく。

3

誰もいない放課後の教室で、矢瀬基樹は携帯電話を耳に当てていた。電話の相手は、人工島管理公社に勤務する十歳年上の異母兄――幾磨だ。数日前に暁古城が、謎の機械人形に襲撃された。その襲撃者が特定できた、と幾磨から連絡があったのだ。
「〝人形師〟……？」
兄の口から聞かされた襲撃者の愛称に、矢瀬は小さく眉をひそめる。朧気に聞き覚えのある名前だった。
『ザカリー・多島・アンドレイド――国際指名手配中の魔導犯罪者だ。生体操作の魔術が専門で、人体と機械人形の融合に特に優れた才能を持っていた。欧州の金持ち相手のオークションで、こいつが作った機械人形が、一体何十億円だかで落札されたこともあるそうだ』
「ああ、思い出した。前に絃神島の不法入島者リストで見たぜ」
矢瀬が不機嫌な口調で言う。犯罪者としてのアンドレイドの危険指数はAプラス――絃神島で殺人級の犯罪を実行する可能性が高い、と予想される極めて危険な人物だった。政府獅子王機関から、専従の捜査官も派遣されていたはずだ。
「――で、俺は、そのアンドレイド先生を捜せばいいのか？」
矢瀬が異母兄に訊き返す。世界最強の吸血鬼――〝第四真祖〟暁古城の監視が、矢瀬の役目だ。〝人形師〟がその古城を狙っているのだとすれば、当然、放置しておくわけにはいかない。アンドレイドが迂闊に刺激したせいで、古城に暴走されたら困るのだ。
しかし質問に対する兄からの返事は、矢瀬にとって意外なものだった。
『いや。〝人形師〟の居場所はわかってる。一昨日〝空隙の魔女〟が発見した。死体でな』
「死体で……？　殺されたのか？」
『おそらくな』幾磨が事務的な口調で答えてくる。『現場の状況を調べた結果、アンドレイドを殺した犯人は、機械人形か人工生命体のどちらかだと結論された。あるいは、その両方の特徴を併せ持つ者、だ』
「機械人形か人工生命体……？　不可能だろ？　あいつらには人間を傷つけることはできないんじゃなかったのか？」
『できるさ。アンドレイドの作品ならな』

幾磨が突き放すように短く言った。
「人形使いが、自分の作った人形に殺されたってことか」
笑えねーな、と矢瀬が唇を歪める。そうだな、と幾磨が嘆息する気配があった。
『スワニルダというのが、その人形の名前らしい』
「そいつはどうなったんだ？」
『逃走中だ。いや……潜伏中というべきかな。ここ最近、市内で連続している失踪事件、そのいくつかにスワニルダが関係していると公社では睨んでいる』
「なに……!?」
矢瀬が表情を険しくする。美しい女性ばかりを襲う人形の噂は、矢瀬の耳にも入っていた。ありふれた都市伝説だと誰もが思っているだけに、殺人人形が実在するとなると厄介だ。無責任な噂に惑わされて、本当の目撃情報との区別がつかなくなる。
『そいつを捜し出すのがおまえの仕事だ。〝人形師〟が第四真祖に接触したという、おまえの報告書は読んだ。その情報が事実なら、殺人人形が再び彼の周囲に現れる可能性は高い』
「なるほどな……」
矢瀬がうんざりと溜息をついた。幾磨がめずらしく情報提供に協力的だった理由に納得したのだ。
『できるか、基樹』
「無理でもなんでも、やらせるつもりなんだろーがよ。だったら最初から訊くなよな」
『自分の立場が理解できているならそれでいい』
幾磨の返事は素っ気ない。矢瀬は小さく舌打ちしながら、ふと思い出したように電話機を握り直す。
「俺からもひとつ訊かせてくれ、兄貴」
『なんだ？』
「殺人人形が関係してるって連続失踪事件の被害者、どうなった？」
一瞬だけ、短い沈黙があった。そして幾磨は、感情のこもらない声で静かに告げた。
『――喰われたよ。殺人人形に融合されてな』

4

「ああっ……！」
帰宅して入浴の準備をしていた浅葱は、脱衣所にある洗濯機の前で、やってしまった、と頭を抱えていた。プールバッグを学校に忘れてきたことに気づいたのだ。
もちろんバッグには濡れたバスタオルと使用済みの水着が入っている。しかも最悪なことに明日からは休日で、週明けの月曜日には再び水泳の授業がある予定になっていた。
「さすがに週末ずっとロッカーに入れっぱなし、ってのはマズイわよね……学校まで取りに行かなきゃだめか」
その場でひとしきり落ちこんでから、浅葱はのろのろと顔を上げた。冷房の効かない日曜日の校舎。閉め切られた教室の気温は、軽く四十度を超えるだろう。濡れたまま通気性の悪いプールバッグに詰めこまれた水着が、その環境に放置された結末は、あまり想像したくない。
部屋に戻って一度脱いだ制服に再び袖を通し、浅葱は渋々と玄関に向かった。時刻はすでに午後八時を過ぎて、窓の外は真っ暗だ。
「浅葱さん？　出かけるの？」
廊下で顔を合わせた継母（ははおや）が、驚いたように声をかけてくる。父親の再婚相手である彼女はまだ若い。仲が悪いわけではないのだが、浅葱は彼女のことが今も少し苦手だった。いい人だと理解してはいるのだが、どうしてもぎこちなくなってしまうのだ。
「忘れ物をしたので、学校に行ってきます。すぐ帰りますから」
継母（ははおや）をあまり心配させないようにと、浅葱はにこやかに微笑んでそう言った。そして彼女の返事を待たずに、靴を突っかけて家を出る。
浅葱の自宅があるのは、人工島西地区（アイランド・ウエスト）の高級住宅地だ。景観は良好だが、駅やバス停が遠く、交通至便とは言い難い。モノレールを乗り継いで彩海学園についたときには、時計は九時近くを指していた。学園の周囲にはほとんど人通りがなく、人工島特有の無機質な景色が際立っている。夜の校舎は暗闇の中に沈んで、ひどく不気味だ。
「まあ、普通に閉まってるわよね。この時間じゃ」
ガッチリと閉ざされた校門を眺めて、浅葱は小さく溜息をついた。彩海学園そのものは、ありふれた普通の学校なのだが、〝魔族特区〟内の教育施設ということで、夜間の警備は厳重である。閉ざされた門や周囲の塀は、簡単に乗り越えられる高さではない。
浅葱は仕方なく学校の裏へと回る。そこに職員用の通用門があることを知っていたからだ。通用門そのものは分厚い特殊合金製だが、門を閉ざしている錠前は、市販の電子ロック（リモート）である。
「このタイプなら遠隔操作でいけるかな。モグワイ、よろしく」
浅葱はニヤリと微笑んで、愛用のスマホに向かって呼びかけた。スマホの画面に表示されたのは、不細工なぬいぐるみ風のアイコン画像だった。
『人使いの荒い嬢ちゃんだな。犯罪の片棒を担がせるのはやめてくんねーか？』
紘神島を制御する五基のスーパーコンピューターのアバターが、妙に人間臭い口調で言う。
「いいじゃん。あんた、どうせ暇でしょ」
しかし浅葱は気楽な口調で言い放ち、モグワイはやれやれと彼女の言葉に従った。高性能すぎて誰にも使いこなせなかったはずの人工知能でありながら、なぜか浅葱にだけは柔順なのだ。
浅葱が趣味で作ったハッキングソフトが起動して、通用門の電子ロックを解除した。ついでに校内のセキュリティシステムも乗っ取っておく。これで学校内をうろついても、警備会社に感知される心配はない。
「じゃあ、まあ、行きますか」
自分自身を励ますようにそう呟いて、浅葱は薄暗い校庭へ

と足を踏み入れた。
街灯の光が届かないせいで、夜の学校内では月明かりだけが頼りである。文明から隔離された廃墟の中にいるようで、ひどく落ち着かない気分になる。スマホを懐中電灯代わりに使っているので、モグワイを話し相手にすることもできない。
「さすがに夜中の校舎は不気味よね。こんなことなら、古城あたりを用心棒代わりに連れてくればよかったわ……」
そう言って浅葱は溜息をついた。古城と二人きりで夜更けの教室に忍びこむ——それはなかなか魅力的なイベントだと思われた。校内の雰囲気が少しばかり不気味でも、肝試し感覚で、むしろ気分が盛り上がるというものだ。
しかし残念ながら、ゴール地点で回収するべきアイテムが使用済みのスク水では、今から古城を呼び出すわけにもいかない。ワクワク肝試しイベントが一気に変態チックになってしまう。
浅葱は上履きに履き替えて、無人の校舎に入っていった。暗いとはいえ、通い慣れた自分の学校である。そうそう迷うようなことはない。すんなりと教室に辿り着き、目的のロッカーの前に立つ。
「はい。回収っと」
ロッカーからプールバッグを引っ張り出して、浅葱は気怠く息を吐く。たったこれだけを持ち帰るために、ずいぶん無駄な時間と体力を使ってしまった。
さっさと帰ろう、と思いつつ、浅葱はなんとなく窓の外へと目を向ける。プールで倫に聞かされた〝伝説のフェンス〟のことを思い出したのだ。
「手紙……か」
古城の机を横目で眺めて、浅葱はうーんと低く唸る。浅葱と古城は中学時代からの長いつき合いだ。あの男になにかを伝えるのに、今更、手紙なんて回りくどい方法を使うことなどあり得ない。とはいえ、男子のほうから告白してくるという〝伝説のフェンス〟の効能は、正直、魅力的だった。
「そりゃまあ、あたしとしても、古城のほうから告白してくるなら、話を聞いてあげなくもないけどさ」
浅葱は教室を出て、最寄りの下り階段へと向かう。校舎の中が暗いぶん、月明かりに照らされた窓の外がよく見えた。校庭の植木の向こう側、フェンスに覆われたプールの裏に、受変電設備の入った建物がある。立ち入り禁止の建物の周囲には、安っぽい金属製のフェンスが張り巡らされていた。
「って……え!?」
そのフェンスの前を通り過ぎた影に気づいて、浅葱は思わず足を止める。
目の錯覚かとも思ったが、そうではなかった。闇に包まれた校舎の裏庭を、小柄な人影がゆっくりと横切っていく。黒っぽいドレスを着た美しい少女だ。作り物めいた白い肌と、暗がりの中でもはっきり目立つ奇妙な色の髪。左右対称の人工的な美貌。どことなく現実離れした、幻想的な光景だった。

「あの髪の色……人工生命体（ホムンクルス）？　こんな時間にどうして……!?」
浅葱は困惑しながらも、少女の行方を目で追った。昼間聞いたもうひとつの噂話を、否応なく思い出す。美しい女性ばかりを狙う殺人人形が、彩海学園に潜んでいる、という都市伝説だ。
「まさか、棚原が言ってた怪談が実話だったってこと？　そんな馬鹿な……」
浅葱は自問しながら首を振る。その間に人工生命体（ホムンクルス）の少女は、受変電設備前のフェンスに立ち止まり、そこに挟まっていた紙に手を伸ばしていた。淡いピンクの封筒が、目立たないフェンスの片隅に置き去られていたのだ。
「……ど、どういうこと!?　殺人人形と〝伝説のフェンス〟になんの関係が……!?」
さすがに興味を惹かれた浅葱が、身を隠すことを忘れて、廊下の窓に顔を寄せる。
その瞬間、手紙を回収していた人工生命体（ホムンクルス）が、ぐるり、と首を巡らせた。感情のない大きな青い瞳が、一瞬たしかに浅葱を見る。
「ヤバッ……！」
人工生命体（ホムンクルス）の少女と目が合った瞬間、浅葱は咄嗟（とっさ）に身を隠した。
だが、そのときにはもう遅かった。浅葱が隠れている校舎に向かって、人工生命体（ホムンクルス）の少女が歩き出す。彼女は間違いなく浅葱の存在に気づいている。
そして浅葱は目撃する。
人工生命体（ホムンクルス）の少女が小脇に抱えていたのは、金属製の奇妙な装備だった。鋭く尖った、刃渡り二十センチほどの銀色の刃物。そしてブルバップ式のライフルに似たシルエットの道具だ。
「う、嘘でしょ……！」
ゾッと寒気を覚えて、浅葱はその場にうずくまった。忘れかけていた恐怖が一気にぶり返す。まったく想定外の状況だった。なぜ忘れ物を取りに来ただけで殺人人形と遭遇してしまうのか。
殺人人形はただの都市伝説だと思っていただけにショックがでかい。軽くパニックに陥って、どうすればいいのかわからない。
「モ、モグワイ……！　って、やばっ……校舎内は電波が……！」
圏外表示になっているスマホの画面に気づいて、浅葱の焦りが加速する。〝電子の女帝〟などと呼ばれていても、浅葱自身は普通の女子高生だ。ネット回線から切り離された上に、物理攻撃力を持つ殺人人形が相手では、逃げ隠れする以外にできることはない。
「追いかけてくる……!?　まずい、このままだと……」
人工生命体（ホムンクルス）の少女が校舎に入ってくる気配があった。
鉄製のドアが軋む不快な音が、ひと気のない建物に響き渡る。下に降りる階段はもう使えない。廊下の奥には非常脱出用のシュートがあるが、今から準備している時間はない。

「どこかに隠れてやり過ごさないと……って、どこで……!?」
浅葱は涙目になりながら周囲を見回した。視界に飛びこんできたのは女子トイレの入り口だ。人工生命体（ホムンクルス）の少女の足音が近づいてくる。もはや選り好みしていられる状況ではない。
浅葱はトイレに駆けこんだ。並んでいる個室は四つ。当然ながらすべて空いている。浅葱は迷わずいちばん奥の個室に入る。そして祈るような気分で身を隠した。
「お願い……気づかないで通り過ぎてよ……」
その呟きが終わる前に、突然、女子トイレ入り口のドアが開く。
「……っ!?」
浅葱は思わず息を止めた。心臓の音が耳元で鳴っている。手脚の震えが止まらない。大丈夫、と必死で自分に言い聞かせる。浅葱が女子トイレに隠れているという証拠はなにも残していない。個室のドアにも鍵はかけてない。大丈夫。殺人人形に気づかれるはずがない。
「……!?」
そんな浅葱の耳に聞こえてきたのは、個室のドアをノックする音だった。
もちろん誰も返事をしない。それを確認して、人工生命体（ホムンクルス）の少女がドアを開ける。開けられたのは、もっとも入り口側に近い個室のドアだ。中に誰かが隠れていないか、少女がのぞきこんでいるような気配がある。
続けて二番目のドアがノックされた。そして三番目のドアも。次第に近づいてくるノックの音に、浅葱の心臓が止まりそうになる。二番目と三番目のドアが開き、そして再び閉められた。残っているのは、浅葱が隠れている四番目だけだ。少女の足音がドアの前で止まる。浅葱はもはや生きた心地もない。
しかし四度目のノックが打ち鳴らされると思われた瞬間、人工生命体（ホムンクルス）の少女は動きを止めた。彼女はしばらくその場に立ち止まったあと、不意に踵（きびす）を返して廊下へと戻っていく。浅葱にはなにが起きたのかわからない。わかるのは謎の人工生命体（ホムンクルス）の少女が、浅葱の前から立ち去ったという事実だけである。
「た、助かった……の……？」
硬直した全身をぎこちなく動かして、浅葱はどうにか立ち上がる。少女がいなくなってから、三分ほどが経過していた。ほとんど永遠の長さにも感じられるほどの三分だ。
「今のうちに逃げなきゃ……」
震える膝を騙しながら、浅葱はそっと個室を出る。できればこのままずっとトイレに隠れていたかったが、それが危険だと判断するだけの理性はまだ残っていた。
再び人工生命体（ホムンクルス）の少女が戻ってきたら、今度こそ逃げ場は残されていない。それに校内のセキュリティが無効化されている以上、どれだけ待っても、誰かが助けに来てくれる可能性はほぼゼロだ。殺人人形と入れ違いになったこの瞬間だけが、無事に逃走する最後のチャンスなのだ。

膝の震えが、ようやく止まった。大丈夫、と浅葱はもう一度口の中で繰り返す。運動神経にはそれなりに自信があった。たとえ相手が殺人人形だとしても、校舎の外に出てしまえば、どうにか逃げ切ることができるはず。
よし、とうなずいて浅葱は女子トイレの外に出た。
その瞬間、浅葱の視界に小柄な影が現れる。
気配もなくその場に佇（たたず）んでいたのは、人工生命体（ホムンクルス）の美しい少女だ。立ち去ったと見せかけて、浅葱が出てくるのを待っていたのだ。
無表情な眼差しが、至近距離から浅葱を見上げてくる。
「いやあああああああああっ！」
彼女の青い瞳を見つめて、浅葱は今度こそ絶叫した。

5

音響結界（サウンドスケープ）に紛れこんだ異物の気配を察して、矢瀬は愛用のヘッドフォンを耳に押し当てた。
矢瀬は過適応者（ハイパーアダプター）――魔術や呪術に頼らない天然モノの超能力者だ。音を自在に操る矢瀬の能力は、直接戦闘にこそ向かないが、監視や情報収集には極めて高い適性を持っている。殺人人形スワニルダの捜索を任されたのも、その適性を買われてのことだった。
絃神島の中心部――キーストーンゲートと呼ばれるビルの屋上である。矢瀬の周囲に人影はなく、彼に話しかける者は誰もいない。しかし矢瀬は、風に乗って聞こえてくるかすかな声を拾おうと、懸命に耳を澄ましている。
「この足音……？　あいつ、なんでこんな時間に学校にいるんだ？」
呟く矢瀬の表情に困惑が浮かんだ。矢瀬の能力が感知していたのは、彩海学園の校舎内をうろつく藍羽浅葱の足音だった。
彩海学園の周囲には、矢瀬が音響結界（サウンドスケープ）と名付けた、特殊な結界が張られている。その場で発生する騒音のパターンを事前に記憶・解析しておくことで、半径数キロの結界内に侵入した、ほぼすべての人間の行動を把握することができるのだ。本来は〝第四真祖〟暁古城を監視するための結界だが、なぜかそこに浅葱が紛れこんでいるらしい。
「――って、浅葱だけじゃない!?　なんだ、こいつの心音は!?」
矢瀬はヘッドフォンを押さえたまま立ち上がる。
音響結界（サウンドスケープ）がとらえたのは、明らかにまともな生物の鼓動ではなかった。いくつもの心臓が連結されたような異様な脈動。そしてアナログ時計のような精密な機械音。何人もの人間を取りこんだ人工生命体（ホムンクルス）と、機械人形（オートマタ）の融合体。それが浅葱と同じ校舎の中に入りこんでいる。
「まさか……アンドレイドの人形か!?　よりによってこんなときに……っ！」
奇怪な心音の正体に気づいて、矢瀬がギリッと奥歯を鳴らした。
スワニルダが彩海学園に入りこんでいる。そして、なぜか

そこには浅葱がいる。思いつく限り最悪の状況だった。殺人人形に襲われたら、一般人の浅葱には身を守る手段がない。

「クソ！　まずいな、この距離じゃ……！」

矢瀬が携帯電話を握り締めてうめく。キーストーンゲートから彩海学園までは、基樹が能力を全開にしてもかなりの時間がかかる。だからといって特区警備隊（アイランド・ガード）を出動させている時間はない。面倒な事務手続きをしている間に、浅葱が確実に殺される。

彼女を救うためには、矢瀬よりも早く彩海学園に辿り着けて、しかも特区警備隊（アイランド・ガード）を上回る戦闘能力の持ち主の助けが必要だ。

そして矢瀬はたった一人だけ、その条件に当て嵌（は）まる人物を知っている――

「くっ……」

迷う時間は残されていなかった。矢瀬は携帯電話のアドレス帳から、親友の番号を呼び出してコールする。

6

「あ……」

無言で立ち尽くす人工生命体（ホムンクルス）の少女を見つめて、浅葱は呆然と声を洩らした。藍色の髪と淡い水色の瞳。フリルまみれのメイド服を着た小柄な身体。彼女の顔を浅葱は知っていた。ある場所で一瞬だけ出会ったことがあったのだ。

「あなた……こないだ、ロタリンギアの殲教師（せんきょうし）と一緒にキーストーンゲートを襲ってきた……」

「肯定。眷獣共生型人工生命試験体、固有名〝アスタルテ〟と回答します」

藍色の髪の少女が、抑揚の乏しい声で答えてくる。

ロタリンギア正教の殲教師によるキーストーンゲート襲撃。それは世界的にも大きな話題になった深刻な魔導犯罪事件だった。そして殲教師ルードルフ・オイスタッハがキーストーンゲートの封印を破るために使用したのが、人工眷獣を寄生させた試作型人工生命体（ホムンクルス）アスタルテだったのだ。

「どうして……あたしを待ち伏せしてたの……まさか……」

浅葱が怯えた声で質問する。襲撃当日、キーストーンゲートにいた浅葱は、被害者として事件に巻きこまれた。そして戦闘中のアスタルテとも遭遇している。一歩間違えれば、浅葱はその場で彼女に殺されていただろう。

だからこの人工生命体（ホムンクルス）の少女が、再び浅葱を襲ってきたのだとしても、それを不思議とは思わなかった。彼女には、浅葱を簡単に殺すだけの力があるのだから。

しかしアスタルテの瞳には、浅葱に対する敵意も殺意も浮かんではいなかった。

代わりに彼女は右手に握っていた物体を、そっと浅葱の前に差し出してくる。

「どうぞ」

「え？」

浅葱はわけがわからないまま、差し出されたアイテムを受け取った。それは見覚えのある水泳ゴーグルだった。

「これって……もしかして、あたしのゴーグル？」

「廊下に落ちていました、と回答します」

「あ……」

人工生命体（ホムンクルス）の少女に指摘されて、浅葱は自分のプールバッグを見下ろした。バッグのファスナーは開いている。ロッカーに入れるときに閉め忘れたのだ。そしてアスタルテから逃げる途中に、ゴーグルを落としてしまったらしい。

アスタルテはそれを浅葱に届けるために、トイレの前でずっと待っていたのだ。

「なにか体調に問題がありますか？」

脱力してへたりこんだ浅葱を見下ろして、アスタルテが訊いてくる。浅葱は弱々しい笑みを浮かべて、どこか投げやりに首を振った。

「大丈夫よ。安心してちょっと気が抜けただけ」

「……驚かせてしまったことは、謝罪します。先日のキーストーンゲート襲撃の際、危険な目に遭わせてしまったことも」

機械的な口調で、アスタルテが言う。

しかし浅葱は、廊下に座りこんだまま首を振った。

「ああ、それはいいのよ。わかってるから」

「わかっている、とは？」

アスタルテが怪訝そうに浅葱を見る。人工生命体（ホムンクルス）の少女にとっても、浅葱の反応は意外だったらしい。

「あなたは命令されてただけなんでしょ。それに、オイスタッハさんだっけ……殲教師の人の言い分も、納得できない話じゃないしね」

「感謝します。ミス――」

「藍羽（あいば）よ、藍羽浅葱。それよりも、えーと、アスタルテさん？　あなたはなんでこんなところにいるわけ？」

極度の緊張から解放されて、浅葱にもようやく疑問を抱く程度の余裕が戻ってきた。

キーストーンゲート襲撃の実行犯であるアスタルテの身柄は、人工島管理公社の厳重な管理下に置かれていたはずである。そんな彼女が、どうして彩海学園にいるのかがわからない。

「先日の破壊活動、および付随する多数の罪状に対する処分の一環です」

黙秘されるかと思ったが、意外にもアスタルテはあっさり回答に応じた。

「処分って、もしかしてそのメイド服も？」

「肯定。現在の私は南宮攻魔官（みなみやこうまかん）の保護観察下にあります」

「南宮攻魔官って、那月（なつき）ちゃんのこと？」

なるほど……と、浅葱は妙に納得する。国家攻魔官である那月がアスタルテの後見人になるのは、それなりに理に適っているし、そういうことならアスタルテの今の服装も腑に落ちる。

「重ねて肯定。それに伴い、現在、私は南宮教官（マスター）の夜間宿直警備の代行中です」

「代行って……ああ、そう……」

要するに教職員としての仕事の一部を、那月に無理やり押しつけられたということらしい。もっとも職務に忠実な人工生命体（ホムンクルス）のアスタルテは、那月よりもよっぽど校内の警備には向いているだろう。校舎内にいる浅葱を見かけて追いかけてきたのも、宿直勤務の一環だったのだ。

「じゃあ、さっきあなたが持ってた凶器は？」

「凶器……というのは、これのことでしょうか？」

アスタルテはそう言って、足元に置いてあった荷物を指さした。遠目にナイフとブルバップ式ライフルに見えた彼女の装備は、よく見ればありふれた園芸用品だった。

「スコップと……如雨露（じょうろ）？」

「花壇の植え替えを執行中でした、と補足します」

なによそれ、と浅葱は再び脱力する。アスタルテを殺人人形と誤認したのは、完全に浅葱の早とちりだったわけだ。むしろアスタルテに失礼な話である。彼女は与えられた宿直の仕事を、黙々と実行していただけなのだから。そして――

「あ……！　その手紙……って……」

アスタルテがエプロンに挟みこんでいた封筒に気づいて、浅葱が思わず声を出す。明らかにラブレターとおぼしき淡いピンクの封筒。〝伝説のフェンス〟にお供えされていたものだ。

「遺失物と推定します。受変電設備のフェンスに挟みこまれていたものを回収しました」

アスタルテが淡々と返答する。浅葱が目撃したとおりの説明だ。

「どうするの、それ？」

「宛先が書かれているので、配達します」

「え……じゃあ、もしかして今までの手紙もあなたが届けてたの？」

浅葱が軽く唖然としながら訊き返した。だとすれば、これまで〝伝説のフェンス〟に供えられたラブレターは、本来の宛先にすべて配達されていたことになる。

「肯定。あの通路を日常的に通行するのは、私だけだと回答します。プール裏の倉庫に人工生命体（ホムンクルス）用の調整槽を設置させてもらいましたので」

「イマイ先輩のマフラーも……？」

「肯定。その差出人は記憶にあります」

「あー……そう……そういうことね……」

浅葱は耐えかねたようにクスクスと笑い出す。

フェンスに突っこまれたラブレターは、本来受け取るべきだった人物の手元に届いていた。そしてラブレターを受け取った人物が、その差出人に交際を申しこむのは、特におかしなことではない。それが「ラブレターをお供えすると意中の相手が告白してくる」という、〝伝説のフェンス〟のメカニズムだ。

もちろん手紙を送った女子全員が上手くいったわけではないのだろうが、しょせんおまじないだと思われているのだから、返事がなかったからといって彼女たちが落ちこむ理由もない。要するに〝伝説のフェンス〟とは、

都市伝説でもまじないでもなく、アスタルテが恋のキューピッド役を務めていたという、ただそれだけのことだったのだ。

「まさか〝伝説のフェンス〟が、そんなしょうもないオチだったなんて……」

きょとんとしているアスタルテの前で、浅葱は笑い続けている。伝説の舞台裏を見せられた感じで少し残念ではあるが、それよりも清々しい気分だった。アスタルテにはいっさい悪気はなかったのだし、実際、彼女のおかげで幸せになった人々もいるのだから。

ひとしきり笑い続けた浅葱が、ようやく落ち着きを取り戻したころ、不意にスマホの着信音が聞こえてきた。同じ校舎内でもこの辺りは電波が届いているらしい。

「あれ、基樹じゃん。なによ、こんな時間に――」

画面に表示された名前を確認して、浅葱が応答ボタンを押す。スピーカーから飛び出してきたのは、いつになく焦った矢瀬基樹の声だった。

『浅葱、無事か!?』

「え？　あ、うん。どうしたのよ、そんなに慌てて……？」

『話はあとだ。今すぐそこから離れろ！』

理由も伝えないまま、矢瀬が一方的な口調で言う。浅葱は思わずムッと頬を膨らませ、

「そこからって、どこからよ。あたし、今、学校にいるんだけど」

『だから逃げろって言ってるんだよ――！』

矢瀬が乱暴な口調で命じてくる。いつも飄々（ひょうひょう）としている彼が、こんなふうに感情を剥き出しにするのはめずらしい。

『おまえも殺人人形の噂は聞いたことがあるだろ！　そいつが彩海学園に入りこんでるんだ！』

「ああ、殺人人形ね。今、ちょうどお話ししてたとこだけど」

苛立つ幼なじみとは対照的に、浅葱の口調は朗らかだった。電話回線の向こうで、矢瀬が絶句する気配が伝わってくる。

『話してた!?』

「そうよ。電話、代わろうか？　ねえ、アスタルテさん、ちょっといい？」

浅葱が人工生命体（ホムンクルス）の少女に向かって呼びかける。今ここで矢瀬にアスタルテを紹介したら、さぞ驚くだろう、と思ったのだ。しかしアスタルテからの返事はない。

彼女は無表情に立ち尽くしたまま、廊下の奥を見つめている。

「……アスタルテ……さん？」

彼女の視線を追って浅葱は何気なく振り返り、そして凍りついたように動きを止めた。

薄暗い廊下の奥に、もう一体の人形が立っていた。

雰囲気はアスタルテに少し似ている。小柄な体つきと人工的な美貌。髪の色は純白だ。

しかしアスタルテに似ているのは、半分だけだった。その純白の髪の少女の右半身は、醜く焼けただれていたからだ。棚原夕歩が語っていた、都市伝説の殺人人形の姿そのまま

に――

『見……ツケ……タ』

浅葱たちを見つめる人形が、唇を大きく裂くように笑った。機械を埋めこんだ左腕が変形し、現れたのは血に濡れた山刀（マチェット）だった。

7

本能的な恐怖に衝き動かされて、浅葱は無意識に立ち上がっていた。

山刀（マチェット）を振りかざす殺人人形には、蜘蛛に似た八本の金属製の脚が生えている。胴体はブヨブヨとした半透明の肉塊だ。生理的な嫌悪感を抱かずにはいられない。

「なによ……あいつ……!?」

浅葱がジリジリと後ずさる。それと入れ替わるように前に出たのは、アスタルテだった。

「警告。逃走を推奨します、ミス藍羽――」

金属製の如雨露を構えて、アスタルテが言う。

「逃げろ、ってこと!?　だけど、あなたは……!?」

「宿直代行として、侵入者を捕獲します」

人工生命体（ホムンクルス）の少女が冷ややかに答えた。

それを聞いた殺人人形が、ニィ、と満足そうに唇の端を吊り上げる。

「無理に決まってるでしょ！　そんなスコップと如雨露でどうするつもり!?」

浅葱が、アスタルテを強引に引き寄せた。

殺人人形が攻撃を仕掛けてきたのは、その直後のことだった。大気を裂いて振り下ろされた山刀（マチェット）が、アスタルテの如雨露をばっさりと切断する。薄闇の中に煌（きら）めいたのは眩（まばゆ）い火花だ。凄まじい山刀（マチェット）の威力だった。

「言わんこっちゃない！　ほら、逃げるわよ！」

アスタルテの腕をつかんだまま、浅葱は全力で走り出す。幸いにも今回は階段が使えた。八本脚の殺人人形は、その巨体が邪魔になって校舎内では動きが鈍い。逃げ切るのは、それほど難しいことではないはずだ。

「なぜですか、ミス藍羽？　あなたには私を助ける合理的な理由はないはずですが？」

浅葱に手を引かれたままのアスタルテが、不思議そうな口調で訊いてくる。

「知らないわよ、そんなこと言われても！」

「ですが、私は人工生命体（ホムンクルス）です」

「なに言ってんの。それこそあたしがあなたを見捨てる理由にならないでしょうが！」

浅葱が一瞬だけ背後を振り返り、馬鹿馬鹿しい、と顔をしかめて言い放った。

靴を履き替えている余裕はなかった。浅葱は上履きのまま校舎の外に出る。

「あたしは保育園のころから絃神島で暮らしてんのよ。あなたが人工生命体（ホムンクルス）だろうが魔女だろうが獣人だろうが世界最強の吸血鬼だろうが全然まったく関係ない。あたしが助け

たいと思ったら助けるの！　〝魔族特区〟育ちをなめないでよね！」

「ミス藍羽……あなたは……」

アスタルテの無感動な瞳がかすかに揺れた。

そして彼女は弾かれたように視線を頭上へと向けた。ほぼ同時に、ガラスが割れる音がした。浅葱が思わず息を呑む。垂直に切り立った校舎の外壁に、殺人人形が立っていた。蜘蛛に似た八本の脚を使って、コンクリートの壁に張りついているのだ。

「は、犯則じゃない、そんなの――！」

浅葱の抗議の声を無視して、殺人人形が近づいてくる。地形を無視した圧倒的なスピードだ。見る間に浅葱たちとの距離が詰まっていく。

アスタルテが、浅葱の手を強引に振り払って足を止めた。そして迫り来る殺人人形に視線を向ける。

「アスタルテさん――!?」

「南宮教官が、なぜ保護観察中の私を彩海学園に連れてきたのか、理解しました。ここには、あなたのような生徒がいるからなのだと」

「え……？」

アスタルテの人工的な美貌には、なんの表情も浮かんでいない。しかし浅葱を見る彼女の瞳には、どこか満足げな光が宿っているようにも感じられた。

「ミス藍羽。私も、あなたを助けたい――執行せよ、〝薔薇の指先〟」

アスタルテの背中に、透き通った光の翼が広がった。それは巨大な腕と化して、殺人人形を正面から迎え撃つ。凄まじい衝撃とともに校舎の壁が陥没し、殺人人形が吹き飛んだ。

浅葱はその光景を呆然と見つめている。

「モグワイ！　なによあれ!?　どうなってるの……!?」

『ふーん……ありゃ、眷獣だな。キーストーンゲートの事件のときにも使ってただろ？』

浅葱のスマホのスピーカーを通じて、モグワイが疑問に答えてくる。

「それはわかってるわよ！　どうして人工生命体のあの子が眷獣を使えるわけ!?」

『なんだ、事件のデータ見なかったのか？　あの人工生命体の嬢ちゃんは、体内に眷獣を植えつけられてんだよ、人工のな』

「そうか……眷獣共生型試験体って、そういうこと……」

浅葱が頼りなく呟いた。眷獣とは異界からの召喚獣。意思を持って実体化するほどの濃密な魔力の集合体だ。その戦闘力は圧倒的だが、不安定な魔力を現実世界につなぎ止めておくために、召喚された眷獣は凄まじい勢いで宿主の寿命を消費する。それゆえに眷獣は、不老不死である吸血鬼にしか使いこなせないといわれていた。

アスタルテは、脆弱な人工生命体の肉体に、その眷獣を寄生させている。彼女は驚異的な技術の産物であり、同時に貴重なサンプルなのだ。

『ああ。だけど、ありゃまずいな』

校内の監視カメラで戦況を眺めていたモグワイが、無責任な口調でそう言った。

眷獣を召喚したアスタルテは、殺人人形と互角の戦いを繰り広げている。それはつまり眷獣の力をもってしても、殺人人形を倒せない、ということでもあった。

『相手は人工眷獣の性能を知った上で、人工生命体の嬢ちゃんを捕まえようとしてやがる……そのために造られた人形だぜ、あれは。このままだと人工生命体の嬢ちゃんは喰われるな』

「喰われる？　融合されるってこと……!?」

浅葱の表情が強張った。殺人人形の不定型の肉体が、眷獣の攻撃をかいくぐり、執拗にアスタルテを狙っている。その動きは、獲物を捕食しようとする獰猛な食虫植物によく似ていた。

『たぶんな。あの人形は、最初からそのつもりで彩海学園に来たんだろ』

「……させないわよ、そんなこと！　モグワイ、お願い！　手を貸して！」

スマホを握り締めて、浅葱が言う。

『そうしたいのは山々だがな、この辺りにはネットワークに接続されてる機械はないぜ？」

モグワイが冷静に指摘した。紘神島全土を制御しているスーパーコンピューターといえども、モグワイは単なる人工知能に過ぎない。直接的な戦闘能力が与えられているわけではないのだ。電子機器をハッキングして乗っ取ろうにも、殺人人形に対抗できる強力な兵器が、学校内にあるはずもない。しかし浅葱は不敵に微笑んで言い返す。

「ここをどこだと思ってるのよ。伝説のフェンスの目の前よ」

『……あん？』

突然、意味不明な都市伝説を語り始めた浅葱に、紘神島最高の人工知能は、どこか途方に暮れたように沈黙した。

8

アスタルテの人工眷獣には、神格振動波駆動術式が刻みつけられている。獅子王機関の七式突撃降魔機槍を解析して得られた、極めて高度な魔術機構だ。それは魔力を完全に反射することで、魔術攻撃に対して無敵ともいえる防御力を発揮する。

しかし殺人人形の正体は、魔力を持たない人工生命体と機械人形の融合体だった、アスタルテの眷獣の攻撃は、彼女に対しては効果が薄い。しかも殺人人形には、アスタルテの眷獣を無力化するような、特殊な装置が内蔵されているらしい。おそらくこの狂った人形は、アスタルテを捕獲するためだけに作られた異形の道具なのだ。

「見つけた……ようやく見つけた。試験体――」

殺人人形の作り物の眼球に、妄執めいた禍々しい感情が浮かんでいる。

「融合する……あなたと融合する。そしてあなたが手に入れ

た〝永遠〟を、私のものに……」

歯車の軋みにも似た不快な声で、殺人人形は喚き続けていた。彼女の連続攻撃に、アスタルテが次第に圧倒されていく。眷獣の実体化を阻害する特殊な電磁波が、〝薔薇の指先〟を侵蝕しているのだ。このまま戦闘が長引けば、アスタルテの敗北は必至だった。

それでもアスタルテは安堵する。殺人人形が狙っていたのは、藍羽浅葱ではなく自分だった。たとえ自分が殺されたとしても、藍羽浅葱が無事に逃げられればそれでいい。

と――

だからこそ自分の背後から聞こえてきた浅葱の声に、人工生命体の少女は驚愕した。

「アスタルテさん！　これ、持ってて！」

浅葱がそう言って投げつけてきたのは、軽量な発泡プラスチックの板だった。水泳用のビート板である。アスタルテは言われるがままにそれを受け取って、呆然と浅葱を見返した。

どうして浅葱が戻って来たのかわからない。彼女の戦闘能力で、殺人人形を撃退できる可能性はゼロだ。むざむざ殺されに来たようなものである。もちろんビート板ごときでは、殺人人形の攻撃を防ぐ楯にもなりはしない。

困惑していたのは、殺人人形も同じだ。あまりにも無謀な浅葱の行動は、彼女にも理解できなかったのだろう。そして動きを止めた殺人人形に向かって、浅葱が白いポリ容器を力任せに投げつける。

「でやあああああああっ！」

ポリ容器の容量は約十五リットル。中に入っていたのは、琥珀色の液体だ。殺人人形の山刀が容器を斬り裂き、その液体が派手に飛び散った。

「……人工生命体用の培養液……？」

頭から液体をかぶった殺人人形が、成分を解析して怪訝そうに呟く。それは人工生命体のメンテナンスに使用する、調整槽用の培養液だった。液中の成分は海水に近く、特に危険なものではない。それを学校内に持ちこんだのは、ほかならぬアスタルテ自身である。

「――もういっちょォ！」

浅葱が再びポリ容器を投げつける。殺人人形は、それを迎撃すらしなかった。金属製の脚を使って容器を踏みつぶし、洩れ出した培養液が彼女の足元に広がっていく。

「理解不能につき、説明を要求。なぜこのような非合理的な行動を取るのか――？」

殺人人形が、蔑むような冷ややかな声で浅葱に訊いた。

「説明されないとわからない？」

浅葱は、ぜえぜえと肩で息をしながら、勝ち誇ったように強気に笑う。足元に敷いたビート板の上に乗り、そして彼女は、ゴムホース状の黒いケーブルを地面に放り投げた。

「人工生命体用の培養液の主成分は、電解質よね。ナトリウムにカリウム、カルシウム、マグネシウムに塩化物イオン――よーく電気を通すわよ」

「――！」

浅葱の説明が終わる前に、アスタルテも受け取ったビート板の上に乗っていた。ビート板の材質は、電気絶縁性に優れた発泡ポリエチレン。すなわち強力な絶縁体なのだ。

「危険性把握。排除する――」

浅葱の狙いに気づいた殺人人形が、彼女を攻撃しようと動き出す。それよりも浅葱のほうが速かった。制服の胸元に突っこんだスマホに向かって、浅葱が叫ぶ。

「モグワイ、お願い！」

スマホからの返事の代わりに、眩い閃光が視界を満たした。浅葱が地面に投げ出したのは、受変電設備から伸びてきた高圧ケーブルだ。彩海学園全体の電力を賄う高電圧の送電線である。最大電力は四千ＫＶＡ――対人用のスタンガンなど比較にならない圧倒的な威力だった。その危険な高圧線が張り巡らされているからこそ、受変電設備の周囲はフェンスで囲まれていたのだ。

「あああああああああああああああ――っ！」

稲妻に包まれた殺人人形が絶叫する。強大な電圧が彼女の生体組織を焼き、全身に埋めこまれた機械を暴走させる。だが肉体的なダメージよりも、彼女を苦しめていたのは恐怖だった。

彼女は過去にも、高電圧の攻撃を受けて傷ついたことがあるのかもしれない。その恐怖に衝き動かされたように、殺人人形は逃走する。

アスタルテは、それを静かに立ち尽くしたまま見送った。

殺人人形を作ったのは、アスタルテを調整した技師とおそらく同一人物だろう。でなければ、眷獣を無効化する装置を、殺人人形に組みこめるはずがない。

ほんの些細な偶然が、アスタルテと彼女の運命を分けた。一歩間違えばアスタルテも、あの禍々しい殺人人形と同じ末路を辿っていたかもしれない。あるいは、その前にアスタルテの寿命は尽きていたかもしれないし、今夜、あの殺人人形に喰われていた可能性もある。その運命を変えてくれたのは〝第四真祖〟暁古城と、彼の監視役である獅子王機関の剣巫。

そして――

「た、助かった……」

ぐったりと力尽きたように、藍羽浅葱が地面にへたりこんでいる。

そんな浅葱を無表情に眺めて、アスタルテは静かに会釈した。

感情を表に出すことができない人工生命体の少女の、精一杯の感謝の表現だった。

9

『――古城、まだか!?』

めずらしく焦りまくった様子の矢瀬が、電話回線の向こう側で騒いでいる。暁古城はうんざりした表情で溜息をつき、乗ってきた自転車を壁に立てかけた。

「今、学校に着いたとこだって。通用門から入ればいいんだな」

気怠げな口調でそう言って、古城は彩海学園の校内へと入っていく。

浅葱が家出した、という連絡を矢瀬から受けたのは、ほんの十五分ほど前のことだった。どうしてそんなことになったのか、いちおう訊いてみたのだが、浅葱が自殺するかもしれない、ヤバい、とひたすら繰り返すだけで、矢瀬の説明はまったく要領を得なかった。とはいえ無視するわけにもいかず、仕方なく古城が浅葱を迎えに行くことになったのだ。

古城が勝手に出かけたことで、監視役の雪菜はたぶん激怒しているはずだが、今それを心配しても仕方がない。

「とにかく浅葱を見つけたらまた連絡するから」

古城はそう言い残して電話を切った。矢瀬からの情報によれば、浅葱はプールの裏あたりにいるらしい。なんでそんなことまでわかるんだ、と半信半疑だった古城だが、プール裏に向かう途中で不意に表情を硬くした。地面の上に落ちていたプールバッグに気づいたのだ。

バッグの取っ手につけられたストラップには、浅葱の名前がローマ字で書かれている。そして使用済みの湿った水着が、ファスナーの隙間からこぼれ落ちていた。

「なんだ、これ？　浅葱の水着……か？」

プールバッグを拾い上げた古城が眉を寄せる。どちらかといえば男っぽいサバサバした性格の浅葱だが、いくらなんでもこんなところに自分の水着を放り出していくとは思えない。なにか深刻なトラブルに巻きこまれたと考えたほうが自然だろう。

「いったいなにがどうなってるんだ？」

古城が困惑の呟きを洩らすと同時に、落雷のような眩い閃光が空を照らした。少し遅れて、人間のものとは思えない、異様な絶叫が聞こえてくる。

青白い閃光の源は、どうやらプール裏の受変電設備らしい。それを確認して古城は走り出す。

やがてプール裏に辿り着いた古城が見たのは、放心したように地面に座る浅葱の姿だった。

「浅葱！」

「……ああ、古城。なにやってんの、こんなところで」

動揺しまくる古城とは対照的に、浅葱が呑気な口調で訊き返してくる。

浅葱の周囲の地面には、砕けたガラスやコンクリートの破片が散乱していた。付近の校舎の外壁には、抉られたような無数の傷跡が残されている。彼女が危険な戦闘に巻きこまれたのは、ほぼ間違いないだろう。なのに浅葱は、不思議なくらいに平然としている。

「なにやってんの……って、それはこっちの台詞だ。矢瀬に頼まれて、おまえのことを捜しに来たんだよ」

「基樹が？　そっか……」

呆れたように言い返す古城を見上げて、浅葱は他人事のように素っ気なく呟いた。古城は、ますます混乱して首を振る。

「納得してねえで説明しろ。なんなんだ、これは？」

「ちょっとね……いろいろあったのよ。殺人人形に襲われたりとか」

「さ、殺人人形……？」

古城がぎょっと目を剝いた。絃神島に出没する殺人人形の噂は古城も知っている。噂好きの古城の妹が、念入りに説明してくれたのだ。もちろんそんな都市伝説を本気で信じていたわけではないが、浅葱が意味もない嘘をつくとも思えない。実際、彩海学園の校舎には、襲撃の痕跡が生々しく刻みつけられているのだから。

「もうすぐ那月ちゃんも来ると思うわ。今はアスタルテさんが呼びに行ってくれてるから」

「え……？」

浅葱の口から出てきた意外な名前に、古城はさらに困惑する。どうして浅葱がアスタルテを知っているのか、いくら考えてもさっぱりわからない。

「……まあいいか。とりあえず、おまえに怪我はないみたいだし。ほら、これ。落とし物」

一人で悩むのに飽きた古城が、拾ったプールバッグを浅葱の前に差し出した。一瞬、面喰らったよう大きく目を開けて、浅葱が甲高い悲鳴を上げる。

「あああっ!?　なんで古城があたしの水着を握り締めてるのよ!?」

「握り締めてねえっ！　おまえが勝手に落としたんだろうが！」

「い、いいからさっさと返しなさいよ、もうっ！」

ほとんど引ったくるような勢いで、浅葱がプールバッグを奪い取る。水着くらい見られてもべつにいいだろう、と古城は思うのだが、そういうわけでもないらしい。

「あー……ほんと最悪だわ。下着まで浸みてびちょびちょだし……」

耳まで顔を赤くした浅葱が、気落ちしたように溜息をつく。そんな浅葱の姿を眺めて、う、と古城が低くうめいた。

「びちょびちょ……って、浅葱、おまえ……」

「へ？」

戸惑うような古城の視線に気づいて、浅葱は自分の足元を見つめる。

浅葱の制服のスカートは、ぐっしょりと湿って染みになっていた。人工生命体（ホムンクルス）用の培養液がこぼれて濡れたのだ。だが、もちろん古城にはそんなことはわからない。琥珀色の液体が浅葱の足元に溜まって、地面に小さな水溜まりを作っている。それはまるで恐怖で腰を抜かした浅葱が、その場で失禁したように見えなくもなかった。

「あ……ち、違う！　違うのよ！」

「お、おう……」

「こ、これは、おもらしなんかじゃなくて、その、培養液が！」

古城の誤解に気づいた浅葱が、声を上擦らせて必死に言い訳する。

しかし古城は、かつてないほど優しい微笑みを浅葱に向けて、

「あ、ああ。悪い、大丈夫だ」

「大丈夫って、なにが!?」

「おまえが恐い目に遭ったのはわかったし、誰にも言わないから」

「だ、だから違うって言ってるでしょ――！　疑うなら臭いを嗅いでみなさいよ！」

追い詰められた浅葱は勢いよく立ち上がり、両手でスカートをたくし上げながら古城に詰め寄った。この致命的な誤解を解かねば、と浅葱も必死だったのだ。

「いや、さすがに俺もそういう趣味はねーから」

しかし古城は、同情的な生温い表情を浮かべて首を振る。ある意味、常識的な反応ではあったのだが――

「うるさいっ！　いいから嗅げーっ！」

ちょうど駆けつけてきたアスタルテや那月の前で、古城に迫る浅葱の怒声が鳴り響く。

深夜の彩海学園、〝伝説のフェンス〟前での出来事だった。

To Be Continued...

ストライク・ザ・ブラッド
STRIKE THE BLOOD

アニメ『ストライク・ザ・ブラッド』第３巻初回特典付録

ストライク・ザ・ブラッド・アペンド１
続・聖者の右腕／人形師の遺産
―第三章―

著／三雲岳斗

イラスト／マニャ子

装丁・デザイン／根津典彦（G-SQUARE）

協力／株式会社 KADOKAWA アスキー・メディアワークス

電撃文庫編集部

© 三雲岳斗 / アスキー・メディアワークス /PROJECT STB